

## 心配の夕ネ（４・４・１８）

柴田 護（昭13・文乙）

ご紹介を頂きました柴田でございます。井垣さんから一度来て話をしろという命令をうけまして出て参りました。私は、父が裁判官をやっておりまして、京都の聖護院の東町で生まれました。次男ですから、真中の字を取って護という名前がついたのです。それも又、妙な因縁で、後日、前尾さんに知事選挙に引っぱり出されることになったのであります。あの時は、皆様方に大変お世話になりました。かつぎ手は立派な方ばかりですが、肝心の馬がまずいばかりに、「淀の競馬」で足の骨を折ってしまつたわけです。その時に頂きましたご厚情に対し遅れ馳せ乍ら深く御礼申し上げます。

私は内務省へ行きましたが、それには何と申しますか、親譲りの正義感みたいなものがあります。して、いわばそのためみたいなものです。当時東京では、学生の取り締りが非常にやかましかったです。それに反抗して、内務省の警察を改革しなければ、将来の日本はだめだ、そのためには内務

省に行かなければ駄目だ。そういう気持を純粹に持って内務省へ行つたところが、内務省で、そんな心掛けの奴はとても警察はやらせないということになっている。それを知っておれば、又別の対応があつたのでしょうか、警察を改革するために来ましてと言つてから、しまつたと思つたのですが、人事課長が話の分かる人で、採用してくれたわけですが、その代り警察はやらしてもらえなかつた。警察は警察署長と、警察部長と警視總監、この三つは面白いのですが、他の補佐機関は、面白くないんですよ。この三つのどれかをやりたかつたんですが、そういう心掛の者はダメだという事で、最も嫌いな財政、税金の制度作りや運用の指導をやらされて、役人生活を終つたわけです。

しかし、上司には恵まれており、僕みたいな言いたいことを言う者を、結構使いこなしてくれて、今になって振り返りますと、私は使つてくれた先輩上司に非常に感謝するんであります、度々失礼なことをしたんじゃないかということを思います。私は選挙というものに、全々関心がなかつた訳です。京都に生まれたと言つても本籍は京都ではありませんし、親父も違ふし、おふくろも違ふ。だから京都人ではないんですが、たまたま京都で生まれたというのが因縁で、京都で学生生活の大半を送つたのですけれども、選挙ということはよそ事みたいに思つていたのが、選挙をやつて、結果は惨敗でありましたけれども、終つた後、自分でやりたいと思つてやつたのではないのだからなんともないと思つていたのですが、やっぱり恨みが残るんですね。選挙の恨

みは10年確実に残る。遺恨10年じゃありませんが、僕はあの詩はよく出来ているなと思うんです。10年位消えませんが。又、蜷川さんの時は、10年位の間京都へ来ますと、「先生、今度はどちらへ」と聞かれるんです。京都駅の駅前でタバコを買うと必ず聞かれたものです。それ位共産党の組織は恐いものですね。私は付け狙われておったと思います。選挙がすんでから今度は本四架橋公園というところへ行くと、前尾さんからの命令であります。私は大体は税財政を専門にしておりますので、本四架橋という土建屋の仕事は、私には全く分からないはずの素人であります。しかしやっているとうちにだんだんと覚えてくるものです。友達がよく勉強したなと云ってくれたけれども、本来勉強も何もしない、朝から晩迄橋の事ばかりで、それも一流の専門家から教えこまれますと、石の上にも三年という事がありますが、馬鹿でも覚えるんですよ。そして結構事務屋のうちでは、技術的によく知っていると事になったのです。それがその後、阪神高速道路公団に行った時に役に立ちました。そういう事を振り返ってみますと、私は何でも役に立つなと、若い時にやっておいて損なものはないと思います。

本四架橋公団の時に補償問題をやらされたのですね、漁業に対する補償です。この頃の魚屋さんというのは第四次産業と言いました、第一次農林水産業、第二次工業、第三次商業・自由業と言いますが、第四次産業とは、文句を言っただけから金をふんだくる連中。これを第四次産業と言ったそうです。私は知らなかったんですけども、本四架橋の大鳴戸橋の起工式をやった時に、

魚屋が攻めて来るといので、攻めて来るのなら来たらよろしい、公務執行妨害罪で全部逮捕してくれと、徳島県警に言ったところが、その話を香川県警に伝えまして香川県警の人が組合に伝えたわけです。行ってもいいが、行ったら引くくられるから止めた方がいいと説得してくれて、とうとう襲われなかったのです。私は昔、北海道庁におりまして、一時水産部長を兼務しました。兼務にしろ水産部長をやっておいて良かったと思つたのは、魚屋さんが来て、鳴戸に橋をかけるのと、自動車のヘッドライトと汽車の騒音で、瀬戸内海へ産卵に来る魚がUターンをして帰る。だからやめてくれと陣情する。たつてやるならば莫大な補償を要求するという。僕はちよつと伺うけど、魚を捕る時は集漁燈で海を照らして魚を集めるじゃないかと、そうして寄つて来た魚をすくい上げる漁法があるだろう、君らの言う事は、そういう事実をどう説明するのだと言いましたら、魚によって違ふというわけです。つまり魚によって、好きな音と嫌いな音、好きな光と嫌いな光があるという。じゃあそれを具体的に教えてくれ、鯛はこういう音が好きでこういう音が嫌い、ぶりはどうと教えてくれたら、先づ嫌いな音を出して全部魚を追い出してから水中ハツパをかけるけれども文句を言うなど言つたんです。それから漁業者は私の処へは陳情に来なくなつたんです。陳情撃退の効果があつたわけです。何でもやってみて損な事はないと思ひました。その頃から漁業補償が喧しく云われておりましたが、関西空港ではもつと大きくやかましく言われました。私達が本四架橋をやっておる頃には、やっぱりある程度大きな問題になりつつあり

ました。魚は県庁に行ったら泳いでおる。つまり魚が捕れなくなっても県庁に行ったら大丈夫だ、補償金をくれるというわけです。

県庁から補償金をふんだくれと、こういう事が漁業者の合言葉、特に瀬戸内海の香川県とか、岡山の漁業者は、やはり海賊の子孫なのか、たくましいので余程心しかからないとやられるような事がございました。どうやら本四の仕事が一応済んで辞めると、今度は阪神高速に行けど、阪神高速に二年半位おりました。

阪神高速はその当時、環境問題で反対が強くてなかなか工事が進まなかったのです。「一九日イッパツの会」という会がありまして、朝な夕な押しかけるわけです。で、相手をしていたわけなんですけれども、要するに海の中の水を砂に変えれば陸上の橋になるわけです。阪神高速も結局は橋梁だから、本四の場合は水だが、阪神高速の場合は土である。それだけの差であって、本四架橋の時の知識というものは、非常に生きたのであります。なる程ここでも私は、物事というものは学んで損になるものはないなあという感じを持つたんです。特にここで私が感じました事は、どうも日本の公共施設というものについての投資の仕方というものが、ケチで決して長い将来を考えていないということです。というのは、大阪の豊中ランプをご存じでしょうけど、豊中ランプは、蛇がカエルを呑んだように、八車線が合流して二車線になるのですが、その合流の距離は非常に短いんです。それで何故このようなバカな設計をしたか、設計者の名前を云えと云ったとこ

ろが、ニコニコ笑って教えないんですね。だから設計者は、ナンノダレベエと、そして予算をつけたのは、主計官ナンノダレベエと書いて彫っておけと言ったものです。橋に彫っておいたら、後で孫がみてうちの爺さん、こんなバカな設計したかと笑うから、そう簡単に妥協出来ないという事になるだろうという事を云ったんですけど、当時それ程技術者というのは、財政圧力に弱かったんですね。それは例えば百万円でこの仕事をするから百万円よこせと予算要求する。それに対して財政圧力で結局九十万円で折れちゃったが、仕事は百万円の仕事をする。だから、結果は出来るんではないかと言われる。それは十万円だけ何処かで無理をすることになる。私は橋を見ていると、道路の幅員と橋の幅員とが違うことに気がついた。橋梁は必ず側溝分だけ幅が小さいんですよ。私に言わしたら、川の上は、補償が要らないんだから、いくらでも広げたらいい。どうしてこれをケチるのかというと、橋の上では車が止まらないというんです。道路の上では駐車するけれども、橋の上では止まらないというんです。だから側溝は要らないと言うのです。これはへ理屈ですね。実際に歩いてみたら、どこの国道、どこの県道、どこの道路も橋の上はそれだけ巾が小さいですよ。嘘じゃありません。全国見て歩いてもらったらどこでもそうです。そこはそういう事で予算を切られているんです。それに屈伏しているんです。それはおかしいと云うんで、補償が要らん分だけ、ウンと拡大したらいいと思うんです。という事は、どうも車社会という事を考えて、日本の都市計画や道路設計というものが出来ていない。今は、東京の高速道路は

一日百万台と云いましたかな、通行台数があつて、もう糞詰りです。それは、運転免許を与える者を少なくするか、車の生産を制限して免許は今のような形にするか、どっちかをやらなければ、只非常事態、非常事態と提言してみたつて話にならん。そこに私は、非常に不満というか、憤りを感じるわけがあります。その高速道路についても、そういう感じがするわけでありまして、要するに貧乏国の高速道路だなあと思います。

ドイツのアウトバーンと比べてみたら問題にならない。東京の高速道路でも、あの39年のオリピックの時にですね、世界銀行が金を貸す時にこれを六車線にしたらどうかという話があつた。往復三車線ですね、世界銀行の方は金はよけいに貸すわけだから、利子がよけいに入るわけですね。そういう事言つたんに違いないんだけど、日本政府の方は、イヤ二車線で結構だと云つて、金を少なく借りたわけです。今の東京の現状をご覧になれば、それは世界銀行の方が、目が見えていたなという感じがするわけですね。どうも一から十までそういう事を感じるわけです。これも非常に短期でしたけど、いろいろ勉強させてもらいました。そして、その後政府の委員会などいろいろとやって、今日に至つたわけです。前置きがや、長くなりましたが、私はいろいろと考えてみまして、もう大体くたばつてもいい年である。ぼつぼつお迎えが来てもおかしくない年令でありますけれども、さて、このまま死んで大丈夫かなあという事を考えますと、どうも気になる事がいくつかあります。そのいくつかをご披露申し上げます、井垣さんの引っぱり出し

に対してお応えしたいと思います。

私は今まで三回ぐらい死にかけまして、不思議にまあその度に奇跡が起って生き返りました。別に宗教じゃないんですが、医学の進歩のお蔭で生き返ったわけですが、本当に終戦直後の日本と、今日の日本はすっかり変わってしまいました。我々もこんな早く復興が実現出来るとは、復員した当時には考えられなかったのでありますが、然しその出来上った復興日本の国は、我々が考えておったのとは全く違ったものが出来てしまったなという感じを深くします。

私は昭和26年に初めてアメリカへ偉い人のお供をして行きました。そして三カ月ばかりアメリカ国内をあちらこちら回されて、そして感じた事は、どうしてこの経済力の圧倒的な差をみぬけなかったのかということです。当時東京はまだ占領時代でありますから、戦災を受けた所は、住民は未だ土の上に屋根を張った壕舎に住んでいたわけです。ワシントンだ、サンフランシスコだと、何処へ行きましたが、この経済力は雲泥の差がありました。この差をどうして見抜けなかったんだと思いました。我々の大公使もアメリカにはおったし、新聞の特派員もおったし、駐在武官もおったじゃないか、これらの人々は一体何をしておったのかと思いました。そして知っておれば、どうしてそれを、生命を張って言わなかったのか、戦争をしたらいかんぞという事を言うべきじゃなかったのかと思いました。それをしなかったから、我々の仲間は多数死んだのではないか。そんな骨のない人物を要路に擁していたのか、一体何故だと。然し考えてみますと、そう



なつたのは要するに教育が悪かつたせいじゃないのか、要するに世界的な視野から物事を眺める教育をしなかつた結果じゃないかと。そこまで考えますと、今度はそういう教育をしたのは何処かと言いますと、軍と東京帝国大学じゃないか。そして東京帝国大学を指導したのは文部省だ。差しつかえがあるかも知れませんが、私はその時非常に軍と文部省に憤満を持ったわけです。戦後六、三、三制反対を内務省が唱えた。その時に日本には六、三、三制は必要じゃないという事を言つて、アメリカにたてつけという事を内務省の意見として文部省に言いに行つた。行つたところが、文部省の初中局長は三高で教えられた日高第四郎先生でした。僕は地方局（内務省）を代表して行きましたので、内務省は六、三、三制に反対ですと言つたのですが、分かつた／＼と、まあそれはそれとして、君まあよく生きて返つて来たと言われ喜んで下さつた。恩師だから有難いんですが、当方の言い分は聞いてくれない。それでまあ、私はその経験からして、その戦争に負けるに至つた大きな原因に、教育の間違ひということがある。つまり、精神修業を必要以上に鼓吹したわけです。それでまあ物質文明にやられて戦争に負けたわけでありますから、科学文明が戦後発達したわけですが、これは敗戦のお蔭で、もし、戦いに勝つておいたら、妙な事になつたんだろうと思ひますけれども、そういう効果はあつたわけです。しかし教育とはその効果が得るのにはいささか時間がかかるのです。教育の成果というのは約20年位経つて出て来る。その当時、つまり敗戦の直後の教育の結果は今出て来ているのです。そこで我々は、我々が終戦後とつ

てきた教育方針、その方針について、やっぱ責任を持たなくてはいけないのではないか。現在の家庭の問題も、学校の問題も、どちらにも責任があるのではないかという感じを持つんです。つまり、現在の教育を考え直してやり直す必要があるのではないか、つまり敗戦の結果、教育は余りにも唯物的になりすぎたのではないか。これがひとつ心配のたねであります。本当に信頼の出来る先生を中心にした小・中教育のやり直しを考えねばならない。金をふんだくって、入学金をせしめて太るような学校を放っておいては、いかんという感じがするのであります。

今ひとつは高令化社会の問題であります。高令化社会という事は、今やかましく言われておるんであります。政府はゴールドプランというものを、平成2年に作りまして、10年計画でもって老人福祉の問題を充実することにしております。それは老人の問題を、介護の問題、医療の問題、福祉の問題といろ／＼あるわけです。私は当面の問題としては悪いとは言いません。しかし、本当の高令者社会の問題は別のところにあるのじゃないかという感じがするんであります。つまり、人口構成が今はズン胴型になっている。それを正常なピラミッド型にしなければいけない。今の若い人は、結婚年齢が上っています。そして、子供の数が少ない。中には作らない人もある。これじゃ、あなた方は、自分で自分の首を締める事になるんだよと私は言うわけです。年を取ったら、誰でも働く事が出来なくなるけれども、年金は君達が負担しなくてはならない。その年金が足らなくなる、そうすると社会が崩壊するよと言うのです。そこに基本を置いて結婚対策を考

えねばいけない。今の若い人々は結婚という事を、経済的理由だけでしか考えてないようであります。で、まあ女性教育が間違っておつたと、大胆不敵に云うだけの覚悟は僕にはありませんが、女性教育にも問題は大いにあるかも知れん、ともかく今のような状態を放っておいてはいかんだろうと思ひます。僕は10年位前に、高令化社会を前にして、早くやらねばらぬ事を或る雑誌に書いたことがあります。それは高令化というのは、我々の観念では、年をとつたら田舎へ帰る、田舎へ帰つて田畑を守るといふのではなかつたか。しかし、この頃では田畑を捨てて人は都市へ集中している。都市はもはや若者の町ではない。そうすると第一番に道路の造り方から変えなければいかんだろうと思ふ。歩ける道といふものを造らなければいかんだろう。散歩道ですね。そして車の走る道と散歩道を作る。車の免許年令だつてそうだ、自動車の運転は普通になつていますが、七十才を過ぎたら特別な人を除いては、免許を奪つてしまへと、そして、免許年令を25才まで引き上げろと言つたわけです。それでもしなくては運転者が増えて、車が増えてしようがないと、そういう事をしばらくやつたらどうだといふことです。家の造りも同じだと思ふのです。家の造り方だつて階段があつて、手すりを付けるのはいいですが、ちよつとした段差で、お年寄りはずまづくわけです。僕等も経験がありますが、少し段差があればつまずいて、倒れた拍子に足の骨をポキンと折るんです。折つてしまつたらもう長くないですね、三年位でしょう。だからお年寄りとともに共存する型に都会を造り変えろといふことを言つたわけです。今でも私は、この考え方は

間違っているとは思わない。高令化対策というのは、当面政府が言うようなことが必要だけれども、本当の高令化対策とは、若者を早く結婚させて、早く後継者を作る、種を残すという事が、どうすれば出来るかという事を真剣に考えるべきだと思います。町作りを考えるのと同じように、そういう事を考えるべきだ、そうしなければ、日本の社会はおかしくなるぞという話を書いたのであります。今も、そのように考えるのであります、そこらのところの考えが、政府の考えと違います。私は、政府の考えに異論を持つのであり、もう一步前進して欲しいのであります。その基本のところをはつきりせずに、目の前の事ばかりやっているじゃないか、それではいかんと思っております。遠いところを見て、物事を決めていくような方向に、引っぱっていかなければいかんのかなあという感じがしてしようがないのであります。

今、生活大国と言われているのですが、生活大国の一番中心なのは、何かと言うと、住宅です。私は東京へ行つて、これが生活大国の住宅かと思つて情けなくなるのであります。日本には日本なりの住宅があつてもいいじゃないか、マッチ箱を積み重ねて、下が狭いから上に積み上げればいいのだというだけの事ではいかんのではないかと思ひます。私は、住宅建設に従事する人達に反省を求めたいと思ひます。14階位の所に生活をしますと、下に降りて来るのが面倒くさい。又心配で子供を一人下に降ろすわけにはいかないので、子供は家でファミコンか何かして遊ぶ事になる。そうすると子供の社会圏を養成する事にはならないと思ふんです。例えばその間に幼稚園

を置くとか、20階あれば10階辺に幼稚園を置く。そこに降りればわいわいと騒げるとか、エレベータには、他所者は勝手に入れないとか、何か工夫をしなければいかん。今のような形では社会不安を増加するだけである。宮崎という青年がいましたが、若い女性を何人も殺したああいう人間を多数養成する事になりはしまいか、好まずして、そういう人間が出来るんだと声を大にして言うんですけれども、それもまあ必ずしも実現されないもので、私は気になって仕方ありません。その次に気にかかる事は、第一次産業というものの根本的な再建策を、本当に真剣に考えていただきたい。この席には、そういう専門家の方もいらっしやいますでしょうけれど、どうも日本の国は、かつて農業や林業や、水産業というものを、経営的に眺めたことがない。増産、こういう物を作ろう、それを作る為にはどうすれば良いかという事については、努力したのでありますが、一体経営形態として、どれ位の耕作面積でどれをどれ位作つたらいいのかという事を真剣に考えた話は、私は聞いたことがない。それをやっぱり考えて農林家を指導する必要がある。農業の採算性を頭に置いて、経営的に考える必要があるのではないかという感じがするんです。同じように中小商工業にも同じように問題があるのではないかと思えます。これも産業政策上でいいますと、適性配置ということをも、もう一辺やり替えたらどうだと、やり替えないとおかしくなると思うのです。前に、偉い人が集まって、一つの基準みたいなものを作つたものを拝見したことがあります。もうあの時代と大分時代が変わっていますので、もう一辺見直す必要があるんじゃないや

ないかと思いません。

私はよく日本を香港にする気かと言うんです。香港というのは、要するに商業だけであって、それだけの独立の地位であった。後にイギリスがあつたから、あれで何とか持った。イギリス海軍があれを支えたわけです。日本は経済大国といつても軍事力も全部人に頼っておつて、そしてまあ言うならば傭兵、アメリカにすべて守らせておいて、中で裸踊りしているようなもんじやないか、それじゃあいかにもお粗末じやないかと、僕はよく言うんですけれども。別に軍隊をうんと置いて、訓練をしようと言うのではありませんけれども、国の意識、国家意識というものを、どのようにして持たすか、お互いに持つかということと同時に、産業の再配置ということを考える必要がある。私は、物事がだんだん分科しすぎて、専門家の言う事をどうしたら総合でできるかという事を考える必要がある感じがいたします。病院に行きましても、一つの科で分からないと、又別の科へ廻される。そこで分からないと、又別の科に廻される。そうしたらそこでも分からないという経験がございませんか。私はそういう経験を持つんですけれども、同じ事が他の分野でも言えるのではないかと思えます。昔こういう事がございました。

私が北海道におつた時のことですが、当時北海道は、冬期野菜は内地から殆んど空輸しておつたわけです。内地の野菜の値段に、飛行機運賃が加算された。土地の人は、秋に大根を採つて土の中に埋めておいて、冬期のタンパクの補給源にしたわけです。私の仕事は予算の切り盛りをし

ておったわけですが、じつと見ておって、こう考えました。当時札幌市に10万本の煙突があった。それから四六時中、九月頃から翌年三月頃まで、ストーブの煙が出ているわけです。余熱を空中に出すのは、如何にももったいないなあと思つたものです。たまたま我家に熱帯魚を飼つていまして、その経験から言いますと熱帯魚は温度調節は要りますけれど、螢光灯をつけませんと藻が繁茂しない。螢光灯が切れますと藻が枯れてしまう。そこで螢光灯には太陽光線の作用があるんじゃないかと思つた。私は農業は素人ですが私は野菜のアパートを作つて螢光灯をつけ、ストーブの余熱を引き込んだら、冬期野菜が出来るはずだ。ただどれだけの規模でやればいいかという適正規模の計算をする必要がある。そのアパートへストーブの余熱を引き込んで暖房する。そして光は螢光灯を使う。そうすれば野菜を内地から空輸しなくてもいい筈だと、その研究をして下さいと農務部の連中に言つたわけです。やる気があつたら試験場に金を付けるよと言つた。そうしたら農務部の連中は、私の顔を見て、素人が馬鹿をぬかせという顔をするわけです。やらん気なら予算は頂くよと言つてどうどう予算は付けなかつたのです。後で、その話をして、その方の専門家に聞きますと、やっぱり太陽光線の何十パーセントかを螢光灯は持つてゐるのです。僕はその話をして、たまには素人の言う事も聞けと、玄人、玄人とはかり言つて、玄人ばかりで議論をしていたら、ミクロの世界か何か知らないが、ミクロに入つちやうて、もう少し大きな意味の総合的なものを見落してしまうのじゃないかという感じがするのです。

この頃、僕は林業というものについても思うのです。何か機械化だと言って、スイスカどこかに機械を買いに行ったという話を聞いた。日本にはいくらでもロボットがあるが、これを林業に利用出来ないのかと、自動車の組立の精密なのをやるロボットを、もつと小さくして、タンクみたいに小さくして、ラジコンで動かせばいいのだ。そんなことをどうしてやらないかと、それをやる為に公有林とか、国有林があるのじゃないかとひやかす訳です。そう簡単にはいかんといひます。簡単にいかないのは分かるけれども、スイスまで買いに行くことはいかないよと、高い旅費を使つてという事をいうんですが、そのへんのところもやはり専門くで素人の云う事を聞いてくれない。素人の云う事もたまには考えてみる価値があるんだよという話をするわけですが、そんなこともございます。農業、林業の問題は、結局基本的には土地問題をどうするか、土地問題を解決しなければ、なかなかあるべき所には到達せんだろうと思ひます。日本は所有権が強すぎるんですね。これをやっぱり利用権中心のものに再編成しなければならぬ。問題は総論賛成だということですが、実際にやらなければなんにもならない。そういう問題を誰が一体引きずつて行くかという、私は政治の力だと思ふ。何の資源もない日本で、有るのは人間だけだという事で、何が中心になるかと言へば、知恵と技術の力だと思ひます。そういう意味で、私は原子力発電についてのやり方がどうももうひとつ気に入らない。原子力発電が気に入らないということでは反対する人には電気をやらなければよい。原子力発電の安全性を、どうして確保するかという前向き



の姿勢じゃなくて、そんなもの危ないから放っておけというのなら、どうかローソクで生活してほしいと。そうじゃなくて、エネルギーは何もないんだから、日本は原子力発電が必要なのであって、その為にはどうして安全に原子力を使うかという事を考えて欲しい。考え方があべこべじゃないかと私は思う。私は中国に四年おりました。四年間鉄砲を担いであちこち歩いてみて思い出したのは、あの国は無尽蔵な資源の国です。何でもあります。タングステンからモリブデンから何から何まである。しかも揚子江に今度は最大のダムを作る。まあ水没者が二百万とか一千万とかいうんですね。あのダムを作って電力を起こしましたら、沢山原料があるのですから、技術力さえ与えたら大変な国になる。恐れられる国になると思います。それを思いますと、日本の国は、「危うし日本」という感じがするのであります。こんなことではいかなあという気がするのであります。

よく僕の友達で悪口を言うやつが、日本の国は技術、経済、流通の世界では、21世紀だ。しかし行政は19世紀、政治は18世紀だと、こう言いますけれども、私もそう思わないでもない。やっぱり、政治行政はしゃんとしてもらわん事にはいかん。これはしゃんとさすためには、いろいろ議論がありますけれども、私はやっぱり納税者をもっとしゃんとして文句を言わなければいかん。それは納税者の務めだと思う。納税者は、納税することだけが務めじゃなく、納税に伴うバックペイというのかな、要するに国民に対する正しい与論の喚起ですね。俗論に対して批判を加える。

そういう事をしなければ、いかんだらうと思います。

行政の改革についても、ああでもない、こうでもないと言ひまして日を送っています。これも我田引水と言われますけれども、私はやっぱり戦後、内務省をぶつつぶした、これは私らはつぶされた方でありませうけれども、つぶしたのは進駐軍、GHQであります。内務省をつぶしたのは間違ひだったと、内務省のない国は、世界中どこへ行つてもない。日本だけである。それは具体问题で言いますと、今閣議で、ああでもない、こうでもないと言論されている問題で、内務省があつたら、内務省の中の省内問題で片付く問題が六割、六割迄の問題が省内で片付く。もつと大きな問題が閣議に上つてくる。それでいいんだらうと思います。そもそも大臣の数を二十人にも増やして、そしてああでもない、こうでもないと言ふ必要はない。役所の数も多すぎるし、役人の数も多い。もつと簡素化する必要があると思ひます。政治については国民からは政治不信という事を招いている。しかも救いがたいような状態を招いている。これをひっくり返すものは良識ある国民しかない。国民が、納税者が反発しなければだめです。マスコミなどが何か言つたつて、たいした事ないです。マスコミもいろいろ言つておりますけれども、新聞代はどんどん値上げするじゃないですか。物価高を云々しても新聞が真先に値上しているじゃありませんか。私にはあんまりいい事ばかりやっているとは思えないのであります。

さて、そういう事を考えますと、政治って一体何だらうと考えます。これは一言に言ひますな

らば、私は見通しと決断だと思います。見通しのないのは政治と言わない。決断のないのも政治とは言わない。見通しと決断何れかを欠いたら、政治にならない。それは政治家でなくて政治屋という。だったら行政は何だと、私はそれは理論を感情に溶けこませる事だと思う。こういう言い方は変ですけども、理屈はこうだと言っても、納得してくれない。それをどうして納得さすか、これが行政だと思うのです。ところがこのどちらについても、今、日本ではこれで大丈夫かな？という感じを持つんです。僕に言わすと、やっぱり今なすべき事は何かと言えば、中央政府の政治も行政も身軽になって大いの仕事は地方に委譲する。そして国も地方も行政を改革し簡素化して行かねばならないと思います。地方行政も改革して行かなければならないということは、皆さん方も分かっている。県も、現在のような小さな県でやって行けるとは思っておられない。大きくして行かねばいかんだろう。必要なものは、行政改革と、政治改革です。政治改革はいろんな案がありますけれども、やっぱり人数だと思っんですね。あまり余計な人数を置いておくのなら、それにふさわしい待遇にしたらいい。少なくするのなら、それにふさわしい待遇にしたらいい。僕の友達が、衆議院は三百でどうだ。そして参議院は百だと。月給は倍にする。そして国の役人の数は月給を倍にして半分にしたらどうかと言う人がいる。なるほどそうかも知れん。そのほかいろいろ物事を見えますと、いかにも我が国は行政の規制が多すぎやせんかという感じを持つんです。

私は鈴木さんに頼まれて、東京都の13号埋め立て地という所がございますが、そのの基盤整備の仕事をやらされておるんです。言うならば、土建屋ですね。共同溝を作って、その中に上下水道、電気、ガス等の管、それからゴミの吸引施設の管を引っぱり込んで、それを13号埋め立て地に張りめぐらす、そういう仕事をさせられておりますけれども、私はその仕事をやっておって、国の出先なり、国の関係者の、地方行政への干渉の激しさというものをいやという程体得するのであります。私は部下には君達は、よく黙っているなあと、俺なら、とつくの昔に喧嘩だと、よく言うのです。喧嘩したら終りですから、という言葉がハネ返って来るのですが、どうも細かい権限が多すぎる。例えば、例の自動車の安全の点検をしますね。あの制度だって、何も余計なお世話と言えば、余計なお世話ですね。ある意味に於いては、自分の命は自分で守れという基本が、日本国ではどうかしている。例えば自動車の安全ベルトがありますね、あれを付けないと罰金を取る。罰金を払ってまで警察に守ってもらう命ではないですね。自分の命は自分で守れと言いたくなる。一事が万事そういう事で、ずうっと世の中を見たら、本当に規制が多すぎる。そういう感じがするんであります。その規制がある限り、今の政治体制は生きて行くだろう。だが、どこからか切り口にして改革を始めなければならぬ。定数から始めるか、報酬から始めるか、或いは行政の末端から始めるか、行政の大本から始めるか、その切り口が一体どつからかなという感じがしてしょうがない。まあ心配してもしようがないんで。お前達は、もう死ぬんじゃないか、

死ぬならもう黙っておれというかも知れない。又若い連中は、君がいうように、そう見捨てたものでもないよ。若い人にもしつかりした者もいるよという人もいる。しかし、夜な夜な六本木の辺りを歩きますと、これでもいいのかなという感じがする。上野の山に行けば、外国人がたむろして、これでもいいのかなあという感じがするのであります。

国際化、国際化と言っけれども、国際化の意味が間違っていないかという感じもするのであります。まあ、すっこんでおれば、物事がうまく行くのなら何も言いませんけれども、そういう事を話してみますと、俺もそう思うんだという人が意外に多いんです。そうすると、やっぱり言わなければいかなのかなという事で、以上心配だなあという事を若干拾ってみたのです。

充分な話ではございませんが、一応今迄考えている事の一端を申し上げてみたわけで、後は、ご質問に応じて自分の気持ちをお話申し上げたいと思います。あんまり腹を立てると動脈硬化を起こしますので、腹は立てませんけども、言いたい事は、言わして頂く積りです。これは第三高等学校で教わった、自由なる批判精神であります。いい学校に学んだなあという事を、時折痛感させられるこの頃であります。御静聴有難うございました。

(助地方財務協会会長・元阪神高速道路公団理事長)